

# インドのマスキュリニティと現世放棄

國 弘 暁 子

Indian Masculinity and Renunciation

Akiko KUNIHIRO

## 第一章 はじめに

既存のジェンダー規範から外れた人々を表象する概念の「第三のジェンダー」は、これまで非西洋社会の中にセクシャル・マイノリティを創り出すカテゴリーとして機能し、西洋との差異が刻印された反転像としてその姿を実体化させてきた。西洋と非西洋の二つのマイノリティ像は、ローカルな文脈を超えたところで本質的な共通の特徴をもった個を想定させ、互いを引き寄せる効果をもつ。事実、二〇〇七年の四月、パメラという女性名を名乗るイギリス人が伝統的なアジアの「第三のジェンダー」と表象されるヒジュラのもとを訪れ、インドの地元メディアや海外メディアを賑わせていた。イギリス本国で性同一性障害の診断を受けているパメラは、ロンドン市内で暮すインド、グジャラート州出身者からヒジュラが存在を聞き知り、ヒジュラが集う場所として知られるバフチャラー女神寺院を訪れたという(2011年10月1日参照、[http://news.bbc.co.uk/2/hi/south\\_asia/6546479.stm](http://news.bbc.co.uk/2/hi/south_asia/6546479.stm))。

ヒジュラが帰依する女神バフチャラーの寺院は、インド北西部、グジャラート州内の中心地から百キロほど北に位置する辺鄙なところにあり、外国人が気軽に立ち寄れる場所では決してない。寺院に近い宿泊施設にしばらく滞在していたパメラは、寺院の警備を担う人物からもらったサリーを纏い寺院を訪れ、ヒジュラ同様に、相手の頭に手をかざす仕草を通じて参詣者に恩寵を授けていた。パメラから恩寵を授かるようとする参詣者の列は絶えなかったと寺院の職員たちからは聞いているが、ヒジュラとパメラとが共に座することはなかったという。その理由として、パメラに対して大勢の参詣者が金銭を手渡していくことをヒジュラの方が快く思わなかったせいでと職員たちは語る。

同年の八月に私が女神寺院を訪れた時点では、パメラはすでにバフチャラーの土地を去っていた。しかし、参詣者の間でパメラの噂が途えることはなかった。私がパメラかどうかを尋ねる参詣者もいたが、そのような参詣者に対して、私の傍にいたヒジュラは「(この外国人は)チョコリー〔*chokri*: 女子〕だよ。あいつは行ってしまった」と、パメラと私が別人であることを伝え、さらに、パメラが自分たちの仲間でないという事実を伝えるために「男のような男だったよ。確認した」と、表現した。確かめられた事実とは、パメラの身体上の男性器の有無を意味していた。つまりパメラが男性器をもった男性であると強調することで、ヒジュラはパメラと同類項で括られることを拒んだのだった。

男女のカテゴリーから逸脱した個を求め、パメラはバフチャラー女神寺院を訪れてヒジュラと対面したのだが、しかし、同じ宗教空間を共有した生身の人間どうしは合流することなく、そこでは「第三のジェンダー」ではない別の切り口による差異が明示された。その差異とは去勢儀礼を経ているか否かによる違いであり、そこにおいて、男性性を象徴するペニスの否定によって獲得されるヒジュラとしてのあり方が示されていた。

本稿では、ヒジュラに義務づけられる去勢儀礼の意義について、マスキュリニティと現世放棄と

いう観点から考察する。

## 第二章 「第三のジェンダー」

ヒジュラに関する先行研究の中でとりわけ高く評価されているのは、アメリカの人類学者セレナ・ナンダ (Serena Nanda) の民族誌 “Neither Man nor Woman: the Hijras of India” である。ボンベイ近郊の都市バステイポール (仮名) で調査を実施したナンダによれば、バステイポールの社会環境はグジャラート州を含む北インド地域とは異なり、ヒジュラが伝統的に担ってきた儀礼的役割による金銭の獲得が困難であり、売春によって生計を立てざるを得ないという [Nanda 1999: 119-120]。しかし、ナンダはヒジュラが売春に従事する点のみ強調することなく、以下の引用で示されるように、あくまでもヒジュラたちが今に引き継ぐ儀礼的役割を重視する。ナンダが重視するヒジュラの儀礼的役割とは、男児の誕生や結婚式といった人生の門出における言祝ぎを指す。

多くのヒジュラが同性愛的売春によって生計を立てていることは疑いようのない事実ではあるが、制度化された同性愛者という社会的地位としてヒジュラを理解することは、儀礼的パフォーマーとしてのヒジュラが担う重要な役割を見落とすことになる。儀礼的パフォーマーとしてのヒジュラのポジションは、男でもなく、女でもなくという、両義的なジェンダー・カテゴリーというヒジュラの定義と結びついているのである [Nanda 1999: 12]。

ナンダの民族誌では「男でなく、女でなく、苦行僧としてのヒジュラ」が主題となるが、「男でなく、女でなく」というヒジュラに対する形容は、「ペニスに欠陥があること、あるいはペニスがない」ために「男でなく (not men)」、また女性に備わる生殖能力の徴候である月経がないために「女でなく (not women)」というように、ヒジュラが生殖に関与しないことを意味する。このジェンダーにおけるヒジュラの両義性が、苦行僧としての地位を与え、さらにヒジュラに対して特定の役割が与えられるとナンダは主張する [Nanda 1999: 10-19]。

その一方でナンダは、ローカルな文脈からヒジュラを切り離し、西洋のセクシュアル・マイノリティの反転像にヒジュラを据えて「第三のジェンダー」と表象する。この〈西洋〉対〈非西洋〉という構図の中で機能する「第三のジェンダー」概念は、西洋におけるセックス/ジェンダー二元論の普遍性を否定することを意図している。しかし、「第三のジェンダー」が「第一」と「第二」のジェンダーという項立ちを前提に成り立つ概念である限り、二元論の普遍性を覆すことには必ずしも結びつかない。むしろ、西洋におけるジェンダーの議論にヒジュラが回収される危険性を孕んでいる。

本稿においては、ナンダが掲げた「第三のジェンダー」という標語は取り下げることが、現世放棄者としてのヒジュラの実存意義に着目するナンダの主張は引き継ぎ、その上でヒジュラとなるものに課せられた去勢儀礼の意義に焦点を当てる。現世放棄の思想では禁欲が重要視されるが、ジェンダーに関する先行研究では、しばしば禁欲主義が「アジア的マスキュリニティ」の特徴として注目されてきた。次章では、「アジア的マスキュリニティ」の問題点を明らかにした上で、禁欲とマスキュリニティとの関連、そして、禁欲と現世放棄との関連について考察する。

## 第三章 南アジアのマスキュリニティ

南アジア地域研究において、マスキュリニティが論じられるテーマは次の二つに集約できるとオゼラ&オゼラは主張する [Osella & Osella 2006]。一つは、植民地支配体制下のアジア男性が、西

洋の男性とは対照的に女々しい (effeminate) 男として描かれるオリエンタリズムの問題である。オリエントをめぐる表象に関しては、エドワード・サイード以降多くの研究者によって糾弾され、南アジア地域研究においても例外ではない。

もう一つのテーマは、男性による精子喪失不安 (semen loss anxiety) の問題である。精子喪失不安、つまり、精子を消費することで男性の強さを喪失することへの不安とは、インド男性に特有な症状と考えられてきた。例えば、カーステアズ (Carstairs 1957) は、非西洋のマスキュリニティについて次のように論じる。健康なインド男性の多くが、無意識に精子を排出する精液漏を重大な病理と認識しているが、その背景には、精液一滴が生成されるまでに40日の日数がかかり、40滴の血液を要するという考えがある。精子漏は西洋ではとても稀な病気とされ、エディプス・コンプレックスによる罪悪感をもった神経症患者のみが精液漏を煩うとカーステアズは述べる。つまり、裏を返せば、インド男性の大半がエディプス・コンプレックスによるノイローゼを煩っていることを示唆している。この点に関して、オゼラ&オゼラは、精子生成に関する40日説は認めているものの、精液漏とエディプス・コンプレックスの因果関係を具体的な説明もなしに主張するのは議論の飛躍であると批判する [Osella & Osella 2006 : 120]。

精子の消費を防ごうとする考え方に関しては、現世放棄者が遂行する苦行の実践にルーツがあるとして、ヴィーナ・ダス (Veena Das 1979) は次のように論じる。聖なる力 (divine power) を獲得するために、現世放棄者は異性との性交を回避しなければならないが、それと同様に、俗世に生きる男性たちも性交を控えることで精子の消費を防ぎ、それによって力を蓄えて健康を保つことができる考える。ただし、男性の本能的な衝動を満足させることも必要であり、彼らは相反する考えを抱えているという。確かに、理想的な現世放棄のあり方として性欲の放棄が重視されるが、しかし、そのような教義上での理想と、一般男性が抱える性欲に対する葛藤とが同じレベルで論じられ、さらに、その葛藤がインド男性すべてに共通する文化的特徴として結論づける点に関してオゼラ&オゼラは異を唱える。精子喪失への不安とマスキュリニティの問題とが強固に結びついた議論が繰り返されることに彼らは疑問を呈しており、そこに西洋とは異なったインド男性の本質を追究しようというオリエンタリストの企ての存在を指摘する。

このオリエンタリストの企てを覆すために、オゼラ&オゼラは女性の間で共有される潤滑油喪失に対する不安の事例を提示する。彼らが調査を行っている南インドのケーララ州では、体内の乾きを危険な状態とする考えが人々の間で広く共有されているという。体内の潤滑油不足は身体を冷やし、サラーフーム (sraavam) やワーダーム (vadam) という疾患を引き起こすと考えられている。サラーフームとは、女性の身体からおりもの等の分泌液が漏洩する疾患であり、ワーダームとは体内の乾きによって生じる関節炎のことであるが、これら疾患への注目度は、男性の精子喪失に対する不安に比べてきわめて低いとオゼラ&オゼラは指摘する。サラーフームやワーダームと同様に、精子喪失に対する不安も体液の減少によって身体が枯渇することへの不安であり、よってインドのマスキュリニティを特徴づける要因とはなり得ないとオゼラ&オゼラは主張する。さらに、精子の消費を恐れて性行為を控える男性心理が必ずしもインドの一般男性にあてはまるものでない点を指摘するため、スリワスタワ (Srivastava 2004) によるセックス・クリニックの調査事例を紹介する [Osella & Osella : 125]。

以上のように、オゼラ&オゼラは、精子喪失に対する男性の不安とは身体が潤滑油が枯渇することで身体が乾くことへの不安の一つに数えられる問題であるとし、インド男性に特有のマスキュリニティのあり方を象徴する問題として議論されることに異を唱える。その上、インド男性に特有のセクシュアリティとして精子喪失の問題が注目されてきたのは、西洋とは異なるインド的なものを追究しようとする西洋側の意図が前景化したためであると指摘する。

ケーララ地域に限らず、グジャラート地域においても、一般の男性が精子を消費することを恐れるが故にセックスを控えていることはなく、むしろ配偶者とのセックスを通じて子孫を残すことを重視する傾向が強い。その一方で、現世放棄を志す者たちにとっては、禁欲、あるいはセックスを控えることは必須条件であり、また周囲の人々も現世放棄者による禁欲を高く評価する傾向にある。従来型の「アジア的マスキュリニティ」論に則れば、厳格な禁欲の実践とはセクシュアリティを否定することであり、アジア的な女々しいマスキュリニティを獲得する手段と見なされるであろう。しかし、現世放棄を志す者たちにとって、セックスを控えることが「アジア的マスキュリニティ」とはならず、むしろ、次章で論じるように、セクシュアリティの領域への積極的な参与と解釈できる。

#### 第四章 現世放棄と去勢儀礼

ヒジュラの去勢儀礼について、セレナ・ナンダは現世放棄者のモデルとなるシヴァ神の去勢をモチーフにした神話を取り上げ、その意義について論じる。世界創造を依頼されたシヴァ神は、海の中へ潜り、そのまま数千年の間地上に戻ってこなかった。依頼主のブラフマー神とヴィシュヌ神は、あまりに時間がかかるので、ヴィシュヌ神の女性的な創造力を用いて、ブラフマー神がすべての神々と生き物を創造することにした。すると、そこにシヴァ神が姿を現し、世界が満ちあふれている光景を目にした。シヴァ神はそれらをすべて破壊しようと火を放つが、ブラフマー神になだめられる。そこでシヴァ神は、「このリングは生き物を創造する以外には不要だ」として、己のリング（ペニス）をへし折って、地上へと投げ捨てた [Nanda 1999: 30]。この神話では、シヴァ神は自ら去勢することによって己の生殖能力を宇宙へと拡大させるが、それは、生殖能力を破壊する行為、つまり、去勢という禁欲の実践であり、豊穡という創造力を獲得するというパラドックスなタパシヤ (*tapasya*) の概念と合致するとナンダは述べる [Nanda 1999: 29-30]。

己を去勢するヒジュラの場合、このシヴァ神の神話とは多少異なり、己のペニスを投げ捨てた先に豊穡がもたらされるのではなく、自らが豊穡の力を備えた存在となるのだとナンダは主張する [Nanda 1999: 30]。南アジアの現世放棄の思想では一般に、精子を体内に蓄えることでスピリチュアルな力を生み出すと考えられており、そのために禁欲が重視されている。確かに、ヒジュラの去勢も禁欲と同様に、精子の消費を未然に防ぐ方法と見なすことはできる。しかし、精子が蓄積されている事実はペニスがそこに在るからこそ他者の目で確認されるのであり、ペニスを己のものとしなないヒジュラの場合は、精子の蓄積を誇示し得るものを欠如していることになる。

去勢儀礼に関するナンダの議論の問題点は、タパシヤの解釈を禁欲、つまりセックスの回避としている点にある。セックスの回避が必須条件となる現世放棄の禁欲とは、セクシュアリティのみを拒否するのではなく、性行為を含むすべての行為を停止するプロセスの一環と見なされるべきである。なぜなら、現世を放棄することの目的は、現世での行為を最小限に留めることであり、現世における行為の報いを来世で受けることなく、輪廻の苦しみから解き放たれることを目指すからである。

紀元前9世紀から6世紀の間に南アジア地域で発展した現世放棄の思想は、人生とはドゥッカ [*dukha*: 苦しみ] であり、この世の報いは来生において受けなければならいと説く。永遠に繰り返される輪廻の苦しみから解放されるために、人は行為そのものを最小限にする必要があり、タパス (*tapas*) と称される苦行や瞑想を通じて、いかなる行為も放棄すること (non-action) を可能とする。ヨーガの教義も苦行の一環として広まっており、体を鎮め、呼吸を鎮め、そして精神も鎮め、現世放棄の境地に到達する [Gavin 1996: 75-77]。

この non-action を意味するタパスには禁欲 (asceticism) という訳語が与えられるが、この翻訳が生む誤解についてウォルター・カエルベは次のように論じる。ヴェーダの文献において、「熱 (heat)」を意味するタパスには二つの性質が含まれており、一つは受胎や出産、性行為といった生殖に係わる行為が生み出す「自然な熱 (natural heat)」、そして、もう一つはスピリチュアルな再生を目的とした苦行が生み出す「非自然な熱 (non-natural heat)」である。これら二つのタパスは、生殖と禁欲という一見すると相矛盾する事象から生み出されるが、苦行の意義を正確に捉えることによって二つのタパスがパラドックスではなくパラレルな関係にあることが明らかになる。苦行とは誕生以前の胎児の状態に己を追い込むことを目的としており、子宮の中で胎児が経験しなければならない沈黙、断食、隔離を克服することで、初めてスピリチュアルな再生を得ることができる。つまり、苦行とは誕生以前の状態に遡る実践であり、性行為とは別のルートから生殖領域に自ら参入することを意味しているのである [kaelber 1979 : 343, 359-360]。

先の「第三のジェンダー」に関する議論の中で、ナンダは「ペニスに欠陥がある、あるいはペニスがない」ことを「男ではない」と表現する。男性性を象徴するペニスを欠いた個であるヒジュラは、シヴァ神に代表される現世放棄者と同様には豊穰性を身体内部に蓄えることができない。ヒジュラの豊穰性とはシヴァ神ではなく、むしろ女神との合一化の側に求められており、マスクュリニティの欠如を肯定する去勢儀礼がその鍵となる。

次章では、「パーワイヤー」という称号をもつヒジュラに焦点を当てて、パーワイヤーの女神信仰のあり方、及び、マスクュリニティを否定する去勢儀礼の意義について明らかにする。

## 第五章 「パーワイヤー」の女神信仰と去勢儀礼

南アジア地域において、ジェンダー規範から逸した人々を総称する語として一般にはヒジュラ (英表記 *hijra*)、あるいはヒジュラー (ヒンディー語表記 *hijrā*) という表記が用いられる。しかし実際には、ヒジュラという一語によって指し示される汎南アジア地域的な存在ではなく、地域によってその名称や活動内容は大きく異なる。本稿が調査対象とするグジャラート地域では、ウェンダラ、ファータダ、パーワイヤー、ヒージャダー (複数形) などの名称があり、それぞれ使われ方にも違いがある。ウェンダロ/ウェンダラとファータド/ファータダは、それぞれ個人あるいは集団を指し示す語として用いられるが、ウェンダラは新聞や大学教授など公的な立場から中立的な発言を求められる際に使用されることが多い。それに対して、ファータダの方は、一般の人々が日常会話の中で相手を中傷する意味を含んで発言する時に使う。

一方、パーワイヨ/パーワイヤーとヒージャド/ヒージャダーとは、ヒジュラ内部を区分する称号として機能する。ヒージャダーとは、イスラームの行者ファキル (*fakir*) の系統を引く者たちを指し、イスラームのしきたりに則った生活を送る。パフォーマンスの際にドラムを使用すること、そして、去勢儀礼を経っていないことがその特徴としてパーワイヤーによってあげられる。ヒージャダーに属する者たちは、生活や活動の拠点をグジャラート地域の中・南部としているのに対し、パーワイヤーに属する者は、グジャラート州北部とパキスタンとの国境地帯に居住していた者たちを祖にもち、そこから南に下って、西側半島と中部グジャラートあたりまで拡散したと伝えられる。ヒージャダーとは違って、パーワイヤーはドラムを使用せず、また去勢儀礼を経ることが義務づけられている。ただし、パーワイヤーの側に属していた者がヒージャダーの側に移ることもあり、去勢の有無によって帰属を明らかにすることは実際には不可能である。パーワイヤーに属するものはデウ (*dev*: 女神) とも呼ばれ、ヒンドゥー女神バフチャラーへの帰依を重視する。

インド社会においてヒジュラが存在する要因として、半身シヴァ神、半身パールヴァティー女神

の姿をした両性具有神アラダナリ、あるいはアラダナーリースワラ (*ardhanārīśvara*) について言及する地元の人々や研究者は少なくない[例えば Pande 2004; Nanda 1999]。しかし、ヒジュラとして生きる者たちが集団でアラダナリを信仰の対象とすることはなく、また、アラダナリとしてヒジュラが人々の信仰を集めることもない。ただし、パーワイヤーと密接な関係にあったカマーリヤ・カーストの男性たちは、かつてはアラダナリのように半身男性の衣装を纏い、半身女性の衣装を纏っていたという。カマーリヤとは、女神の世話係として女神寺院の運営に携わり、現世放棄者として存在していた人々である。女神寺院の運営が州政府の管轄下となった今日では、カマーリヤの人々は女神の世話係として寺院に居座ることはできず、また、現世放棄者としてアラダナリの様相を纏うこともない。

そのカマーリヤの男性の話によれば、パーワイヤーとはクリシュナ・サキー [*sakhī*: 使者] のような存在であるという。クリシュナ・サキーとは、クリシュナ神を信仰するために、クリシュナ神を敬愛する愛人ラーダーの衣装を纏い、ラーダーと自己とを同一化させる信仰のかたちをとる人々を指す。このような神々への帰依の実践はバクティ [*bhakti*: 親愛] と称されるが、それは外見を変えるだけでなく、その人物が現存する意義そのものを変える実践となる [國弘 2006]。ヒジュラの場合も帰依の対象である女神の衣装を纏い、女神との合一化にむけて実現不可能な実践を日々繰り返している。つまり、サリーを纏うヒジュラたちは、女装をしているのではなく、女神の衣装としてのサリーを纏い、女神との合一化を永遠に希求しているのである。

己の現存を変容させるバクティの実践は、男性として生きる者が己のジェンダー・ステイタスをも放棄して、神々に対する親愛の情に陶醉していく信仰の形態である。それに対して、バフチャラー女神に帰依するパーワイヤーたちは女神の衣装を纏うだけでなく、己の身体からペニスと陰囊を切り落とす去勢儀礼までも自らに課している。それは単に「男のような男」であることを放棄するだけでなく、以下で示すように、去勢儀礼を通じて現世放棄者が苦行によって到達しうる段階へと己を導くためと考えられる。

パーワイヤーの仲間として迎え入れられた者が去勢儀礼を通過するまでの時間には個人差があり、その時期を迎えることを仲間内では「女神の託宣が下る」と表現する。近しい間柄にあるヒジュラのスダリさん (仮名) に対して「女神の託宣はどのように下るのか」と尋ねたところ、自分の手の甲を外側に向けて、指を下方向にすぼめた状態で「こうなってしまう」と答えた。この固くすぼめられた手は、勃起しない男性器を真似る仕草であり、生殖能力が欠如することを意味していた。

去勢儀礼を経る以前の段階であれば、新参者はいつでもサリーを脱ぎ捨て、己の親兄弟が暮す俗なる世界へと戻ることができる。サリー姿で活動していた者がシャツとズボン姿に着替えて、かつての仲間のもとに顔を見せに来る光景は時折目にするところがある。しかし、去勢儀礼を通じてヒジュラとして生きる定めを身体に刻み込んでしまった者は、再び元の世界に属することは許されない。

ヒジュラの去勢儀礼では、儀礼的ケガレの期間が設けられるが、それは、生まれたばかりの赤子と同様に、誕生以前の死の段階を経て、ヒジュラとしての生を得たことを意味している。ヒジュラが死と生を一時期に経験したという事実は、以下に述べるように周囲の仲間たちから産後の赤子、あるいは出産した女性同然の扱いを受けることから明らかである。

出産という自然現象の場合には、産後の女性と赤子が居る実家はスワーワダ [*suwāvada*: 産褥] と呼ばれ、産褥の家にはスータック [*sūttak*: 儀礼的ケガレ] が訪れるとされる。それと時を同じくして、女性が嫁いだ先の家にも強力なスータックが生じる。生まれた子供 (とりわけ男児) というのは、婚家の親族成員であるために、婚家の人間も共に儀礼的ケガレを被るのだと説明される。

誕生によって生じるスータックは、赤子の誕生から6日目を境にして大きく減少する。チャッティ (*chhatti*) と称される6日目の儀礼を無事に通過することによって、その赤子はこの世に根付いた

と証明されるためである。それ以前の段階では、赤子は「あの世」に限りなく近い危険な状態にあり、6日目の真夜中に、女神によって運命を額に書き込んでもらうことで初めて「この世」の存在として認められる。6日目を無事に経過した場合でも、赤子と母親は一定期間（大概是37日間）家の中で安静をたもたなければならず、家にいる女性親族が身の回りの世話をする。産後の女性に対しては、シロ〔*siro*：小麦粉の水と砂糖を加えて煮詰めた食べ物〕を食べさせる風習がある。

去勢儀礼を無事に経たヒジュラの場合は、産後の女性と同様に、37日間家の中に閉じこもる。儀礼から6日目にはチャッティの儀式が行われ、この日を迎えることのできたヒジュラは、危険な状態を脱したといわれる。術後のヒジュラは、産後女性と同様にシロが与えられ、さらに、去勢後一ヶ月間は1kgの生姜の摂取が義務づけられる。生姜の粉末とバターオイル、粗糖を混ぜ合わせた「ゴリ」を、儀礼後2日目から生姜を食すことになる。この「ゴリ」は、民間療法では体温上昇と滋養強壯を目的として勧められるが、術後のヒジュラの場合、生姜の摂取によって体内に熱を生じさせ、ヒゲなどの体毛が生えてこないようにするためだと言われる。一般に、南アジア地域では、生殖能力をもつ女性の身体は熱く、その逆に、男性の身体は冷たいといわれる。己に備わるマスキュリニティな要素を完全否定するために、ヒジュラは生姜の摂取によって意図的に熱を生じさせ、男性の象徴ともいえる体毛を除去しようとしているのである。

このように、去勢儀礼のプロセスは、赤子の誕生、あるいは女性の出産と類比的な関係にあることがわかる。それは、現世放棄者が苦行を実践するのと同様に、去勢儀礼を通じて誕生前の段階へと到達するための手段であることを示している。つまり、去勢儀礼を経ることによって、誕生以前の死を一度経験して、そこからヒジュラとしての誕生を得るのである。さらに、不要となった男性器を切り落とすことは、俗的なマスキュリニティの死滅を意図しており、よってヒジュラとなる者は、男性としての俗的な義務・役割を捨てて、帰依する女神への合一化を希求する生を営むのである。

## 第六章 おわりに

ヒジュラとなるものに課せられる去勢儀礼には、俗なる男性性の象徴を取り除き、聖なる女神との合一化をめざす手段としての意義を見いだすことができる。それは現世放棄者の苦行と同様に、セクシュアリティの領域への身体「投錨」〔菅原 2010〕であり、破壊と同時に創造でもあるパラドックスとしては表現し得ない一連のプロセスを意味している。

儀礼を通じて男性器を切除する行為は、精子喪失の回避に繋がるという点から、「アジア的マスキュリニティ」の極地とも解釈できる。しかし、ヒジュラの去勢は必ずしもセックスの回避とは結びつかない。なぜなら、去勢は禁欲を目的とするわけではなく、別の論考でも言及したが、女神の衣裳を脱いだ一生活者としてのヒジュラたちは性器を欠いた情交に興じている〔國弘 2009b〕。ヒジュラとして生きる者たちは、去勢儀礼を通過することによって、女神を象徴する女性性の力、つまりシャクティ (*shakti*) を備えた存在になるのである。よって、ヒジュラは男性性を欠いている点に己の存在意義を見いだすことになる。しかし、地元の人々によれば、ヒジュラにはターカ (*takat*) という男性に備わる力が豊富だとも表現される。その理由は、ヒジュラとなる者は家族をもたない、つまり、己の労力を消費して家族をつくることなく、己以外の存在への配慮も必要としないためとされる。

己の精子を他利的に消費しないという点に着目すれば、この問題はかつてレイ・デュモンが「世界外個人」と名付けた個人主義の議論にも通じる。個人主義に関する論考の中で、東西の個人を比較するデュモンによれば、インド社会では、「各自が緊密な相互依存を強いられ、そのために、われ

われの知る個人ではなく、拘束力の強い人間関係の束が見いだされる。ところが一方、現世放棄者の制度はその道を選ぶ者全てに、完全な独立を許している。…現世放棄者はみずから自足しており、自己のみに専念している」[デュモン 1993:42]。しかし、このデュモンの主張に反して、現実の社会では、世俗の人々の生活に依存するかたちで現世放棄の制度が成立している。なぜなら、現世放棄者は世俗の人々による施与によって生きられているからである。よって現世放棄者が自足した「世界外個人」だとは言いがたい。ただし、ディヴィデュアル (dividual) ではなくインディヴィデュアル (individual) であるという点に関しては同意する。精子漏洩の防御に象徴されるように、確かに、現世放棄者たちは自己の境界を閉ざしており、己の力を自らの内に蓄え、己自身の存続に専念しているといえる。同様に、ヒジュラとして生きる者たちも、己の親族との強固な相互依存関係に己の精子を費やすことがなく、よって、男性性の象徴であるペニスを欠いた身体であっても、かつて男性であった身体内にターカと呼ばれる、生命力ともいえるマスキュリニティを蓄積していると見なされるのである。

#### 参考文献

- Carstairs, M. 1957. *The Twice-Born*. Hogarth: London.
- Das, V. 1979. 'Reflections on the Social Construction of Adulthood'. In Kakar S.(ed.) *Identity and Adulthood*. Oxford Univ Press: Delhi, pp.89-104.
- デュモン・ルイ 1993年 『個人主義論考—近代イデオロギーについての人類学的展望』言叢社
- Kaelber, Walter O. 1979. Tapas, Birth, and Spiritual Rebirth in the Veda. *History of Religions* 15: 343-386.
- 國弘暁子 2008年 「異装が意味するもの：インド、グジャラート州におけるヒジュラの衣装と模倣に関する研究」『非文字資料研究の可能性：若手研究者育成成果論文集』神奈川大学21世紀COEプログラム研究成果報告書
- a 2009年 『ヒンドゥー女神の帰依者ヒジュラ：宗教・ジェンダー境界域の人類学』風響社
- Nanda, Serena. 1999(1990). *Neither Man nor Woman: The Hijras of India*. Belmont: Wadsworth Publishing Co. (烏森 樹、カルマ・シン訳『ヒジュラー男でもなく女でもなく』青土者、1999年)
- b 2009年 「ヒジュラとセックス—去勢した者たちの情交のありかた」奥野・椎野・竹ノ下 (共著) 『セックスの人類学』春風社
- Osella, C and F. Osella. 2001. 'Contextualising Sexuality: Young Men in Kerala, South India'. In Manderson L. and P.L. Rice(eds.) *Coming of Age: Young People, Sexuality and Courtship in South and South-East Asia*. NIAS/Curzon: London, pp.113-131.
- . 2006. *Men and Masculinities in South India*. Anthem Press: London and New York.
- 関根康正 2004年 「ケガレと差別」『岩波講座 宗教 第8巻「暴力」』岩波書店
- Srivastava, S. 2004. 'The Masculinity of Dis-location: Commodities, the Metropolis, and the Sex-clinics of Delhi and Mumbai'. In Chopra R., C. Osella and F. Osella (eds.) *South Asian Masculinities: Contexts of Changes, Sites of Continuity*. Women Unlimited: Delhi. pp. 175-223.
- 菅原和孝 2010年 『ことばと身体—「言語の手前」の人類学』講談社
- Zaehner, R.C. 1966(1962). *Hinduism*. New York: Oxford Univ Press.